

## tokyo 古田会 news

第6号

昭和62年1月

## 古田武彦と古代史を研究する会

☎03-542-7456

〒104 東京都中央区銀座7-18-13 銀座スカイハイツ710号 ACT内

## 定例講演会の内容

八王子市 谷本 茂

十一月三十日(日)に、都内・八丁堀の勤労福祉会館において、「古代王朝と近世文書——そして景初四年鏡銘をめぐる——」と題する古田武彦氏の定例講演会が開かれました。当日は快晴の穏かな日で、百二十名の参加者がありました。



講演は副題の景初四年鏡の話から始まり、銘文をめぐる問題点の数々が指摘されました。

(一)「景初四年五月」の暦上の問題点について、「景初四年五月」の表記は、この鏡が中国本土で作られた場合には考えにくい。

(二)反字(鏡像になっている文字)及び逆字(ヘンとツクリが左右入れ換っている文字)の意味するものが必

ずしも明らかでない。反字・逆字の研究が不足している。反字・逆字はミスよりも、故意に(意味があつて)作っている可能性が高いのではないか。

(三)「詔」(通常は銘)「母人」という用字は中国ではめずらしい。

(四)「景」の字形が極端に歪んでいるので、中国人の作とは考えにくい。

(五)銘文の内容は、宣伝文句の類であり、鏡の商業生産の問題がクローズアップされてくる。

以上の点から考えて、この鏡は中国本土で作られた可能性はほとんどなく、日本国内で作られた模造鏡(「夷蛮鏡」と呼ぶことにする)である可能性が大きい、とまとめられました。

そして、最後に、古田氏は、舶載鏡か倣製鏡かといった従来の議論ではなく、多発的多層的な鏡生産が行なわれたという立場から、出土物(鏡)を見ていく必要性を強調され、前半が終わりました。

後半は、古代王朝と近世文書の接点として、多胡碑に関連した「多胡羊太夫由来記」及び、稲作の起源に関連した「甲斐古蹟考」について触れられました。

残り時間が少なくなったことと、古田氏自身まだ研究の途上ということとで、詳細に検討する余裕はありませんでしたが、近世文書に部分的に残っている古い伝承の中に、史実が反映されている可能性について言及され、「民間伝承はあながち馬鹿に出来ない」と警告がなされました。

多胡碑の削除については、六月の講演会で発見の経緯が報告されましたが、今回、「多胡羊太夫由来記」

(里見村誌所収)が紹介され、削られた碑文の一部と思われるものが明らかにになりました。この由来記は、現存碑文よりも文字の残存率が多い時期の碑文にもとづいて記述されたものと考えられます。

しかし、全体の文の構成、長さ、羊太夫の父母の名前がない点等を考えると、碑文はかなり古い時代に部分的に削り取られていたようです。

(この多胡碑の問題点については、藤田友治氏が「市民の古代」第八集に、「削られた多胡碑」という報告を載せておられますので、参照して下さい)。

一方、「甲斐古蹟考」の中には、向山土本毘古王が綏靖天皇の時代に山梨県に稲作を伝えたという伝承があります。

稲作の始源については、幾つかの説がありますが、板付の水田遺跡などの調査から、考古学者の間では、紀元前四百年ないし三百年というのが通説になっているようです。ところが、放射性同位元素の測定結果からは、紀元前八百年前後百五十年という数値が得られています。後者の年代は、日本書紀の綏靖天皇の時代と合致するわけで、一笑に付すにはちよつと気味の悪い事実です。(「甲斐古蹟考」は八幡書店から複製本が発売されています)。

いずれにしても、古い伝承を含む近世文書は、(もちろん偽作文書も多

いわけですが)頭から無視するのではなく、個々に適確な史料批判が必要でしょう。その作業を通じて、古代の真実を把握していく努力が求められているのです。

「諸市買皆用鐵如中國用錢」考

杉並区 吉田堯躬

三国志魏志東夷傳中の韓傳并辰傳に記されている「國出鐵韓濊倭皆從取之」とそれに続く標題の文を取上げて、古田先生は、三世紀の倭国に「鉄本位制」が成立していると指摘された（「ここに古代王朝ありき」及び「古代は輝いていたI」）。

例によって、学界は、古田假説を真剣に取上げようとはしていないようである。

しかし、右の指摘は、邪馬壹国の社会経済体制を理解するうえで、根本に触れるものであり、賛否いずれであり見逃がしえないものと考ええる。

そこで、ささやかながら古田假説に對し、一方において疑問を呈するとともに、他方、論文の補強を考えたので批判を仰ぎたい。

第一の論点は、「鐵本位制」の本位の内容である。

金本位制という場合には、金以外の流通手段の存在を排除せず、又、金が實際に取引に用いられなくとも許容される。しかし、金が支配的な価値尺度として機能している必要がある。すなわち、量でなく質として金の優位が確立していることがポイントである。「鉄本位制」と呼ぶ場合、①鉄が、流通手段のメインである。②鉄が、その社会（市場）の価値尺度となっている、のいずれを想定しているのか定かでない。

三国志の中国は、奴隸や領土権による強制使役の世界と理解され、私見では価値尺度が統一的に成立していないと思うがどうか。

第二の論点は、「如中國用錢」という時、「錢」が、国内通貨を意味するか、国際通貨を意味するかである。従来、鉄は国際通貨という理解があるようであるが、それが正しいかというところである。

中国では、漢代に五銖錢が鑄造され、三国志にも、董卓がその鑄造を取止め、文帝が復活した記事がある。従って、「錢」とはこの通貨を指すことになろう。

念のため、陳寿の用法をみるため、三国志中の「錢」の用例を調べると四十三回に達している。うち、十回は「錢唐」という地名である。また、華佗傳に二回出現する「散兩錢」は、散薬の重さを示す（筑摩書房の三国志IIで確認）。残り三十一回のうち、三十回は、五銖錢、賜錢十萬、鑄大錢等、日常の通貨を意味することが容易に確認できた。

残りの一回は、「先帝末年雖有呂壹錢欵尋皆誅」とある。私の漢文読解力では意味を確認出来なかつたが、国際通貨を示すものではない。

以上の調査結果から、陳寿が「如中國用錢」と言う時、鉄が市場で用いられる通貨としての「錢」と同じように用いられていると述べており、決して「国際通貨」を示しているのではないことははっきりする。

第三の論点は、倭人傳の「國固有市交易有無」の意味内容である。国々にある市で交易されるのが、有無するものの物々交換だけなら、錢のように鉄を用いることは出来ない。鉄が錢の如く用いられる市は、或る程度の商品売買が行われていると言わねばならない。と言うことは

共同体の境だけでなく、共同体の内部に一部、商品生産が行われていることを意味しよう。例え、それが奴隸（生口？）を用いよう。



下総古代史の旅

杉並区 黒田純子

十月五日、下総古代史の旅に参加した。古田先生のお話に耳を傾けているうちに第一の目的地国立歴史民俗博物館へ予定より十五分も早く到着。開館を待ちながら、三々五々先生のお話伺えるのもこの旅の魅力。昭和五十六年、旧佐倉城址に建設されたこの博物館には、原始・古代から近世までの生活史に重点をおいた十三のテーマと三つのサブテーマによって展示されている。今回は第一展示室の「日本文化のあけぼの」を中心にみた。中でも縄文式土器が日本列島の模型上に出土した地域が目でわかるように展示されたコーナーは、日本列島全体に広く分布した土器、土偶に地域による特色があることが示され、古田先生の多元史観に立つお話が出土品からもわかる。パスの中で先生のお話にあった多胡碑と稲荷山鉄剣、沖ノ島出土品をみて予定時間は終わった。

香取神宮は杉の巨木が林立する広い神域をもつ、日本書紀の国譲り神話にてくる経津主大神を祭神とする下総一の宮である。まず宝物館へ

いく。ここには古鏡が多く、白銅製海獸葡萄鏡（国宝）があった。中国隋時代のものと説明にある。 祢宜さんのご案内で本殿横の栢社前で祭神の名の由来などを伺う。下総の地に海から入ってきた古代人のことがこうした栢社の祭神の名に残り、歴史の真実が明らかにされていくという古田先生のお話に感銘を深くした。

午後は小見川文化財保存館で城山第一号古墳の出土品をみた。土器類のほか三角縁の三神五獸鏡や、竜や鳳凰の文様をもつ環頭大刀があった。次にいった縄文中期の阿玉台貝塚は、もう貝の一片を探すのも困難なほど何もなくなっており、都市化と遺跡の保存はどこまで両立するのだろうか。

最後は良文貝塚と、この貝塚から出土した香炉形顔面付土器で、今回たのしみにしていたもの一つである。この土器は豊玉姫神社にある。この祭神は記紀神代巻の海幸山幸の神話に登場する豊玉姫尊である。日頃は無人のこの神社で、わざわざ戸を開けていたのだいて一同拝殿に上った。拝殿の一隅に無造作に置かれた金庫の中に土器があった。高さ十六センチのこの土器は、前面に顔、背面に大きく横に口が開いている。顔の中央によった目、ふっくらとした頬、縄文人は何に使ったのだろうか。両耳のあたりにある輪は吊るための紐通しという説明であったが、何か飾りを下げたのではないかという意見もでた。三千年の眠りから覚めた縄文の土器を手にも触れんばかりに近々と正面から、横からみると

いうことは、博物館のガラス越しの展示では到底望めないことである。神社を後に良文貝塚にいった。夕闇の迫る畑の土手にそって貝塚はひろがっていた。

道みち、先生からいろんなお話を伺える旅は講演会とはまた違ったたのしみである。

河内・大和の旅

文京区 藤沢 徹

日本書紀は、武烈天皇ほど悪逆非道の暴君はなかったと記述する。例えば、馬とセックスさせ濡れた女は



好色だとして殺した、などなど。古田先生は歴史書の読み方を教えて下さり、夏の築王、殷の紂王は暴政を振ったので、天が革命を行ない、王朝交代が行われた、というの、実はクーデターによる政権奪奪を正当化しようとする陰謀である旨史記を読まなくてはならないといわれた。であるとする武烈の暴政の後に来た男大述すなわち継体天皇は王位篡奪者ということになる。

この継体陵は茨木市太田にある。

日本書紀、延喜諸陵式で三嶋藍野陵というので、明治時代に茶白山古墳を継体陵に定めたが、どうも古すぎ。本当に継体陵なら六世紀半ばの築造でなくてはならないのだ。今は高槻市郡家の今城塚古墳が本当の継体陵だろうといわれている。

十一月一日、古田先生を師とする我々一行は、今城塚を訪れたところブッシュに覆われてどうしても入れないので案内を頼んだところ、地元

の、しかも子供でなければわからない間道を先導してもらえた。けもの道のような、藪の中の坂道を登って行くと、先生が興奮して叫んだ。「あつた盗堀のあとだ」。なるほど、円墳部の頂上とも思えるところが、窪みになっていて。我々は、ある種の感動に浸った。「ここに継体天皇が葬られていたのか」と。

昔は、三百五十メートルあり、今は削られて、百九十メートルと小さくはなっているが、大きい古墳だ。その子と記念写真をとろうとしたら「僕達も入れて」とその子の友達が入ってきた。古田先生は、あたかも教え子の中に立つよう笑顔を浮かべるのだった。

「柿くえば……」

上尾市 法井哲彦

「紙幣からの聖徳太子の引退」この出来事が私を古代史の中に引き入れた原因であった。私にはあまり縁のなかった聖徳太子だったが、その割には親近感を持っていたのも事実だ。皇族であり、大政治家として古代日本を引っばって来たこの人物の事をもっと知りたくて何冊もの本を読ん

だ。その中に古田先生の話が出てくる本があり、先生のお考えに触れる事が出来た。「九州王朝説」。遣隋使の問題など、私にとって驚きの連続であった。そんな時、11月1日、3日までという事で「河内・大和の古代史」と題した旅行の企画に出会い、参加してみた。

初日、二日目と過ぎ、最終日、山田寺跡から東明神古墳、そして私がこの旅行で一番行きたかったところの藤ノ木古墳へと向った。日頃の行ないが良かったせい、その日は絶好の行楽日和となり、胸をときめかせての出発だ。法隆寺の側を通過して約十分、ついに藤ノ木古墳に会う事が出来た。朱塗りの家形石棺を内に見、そして金銅製の裝飾馬具を内に密め、千四百年もの間寝りについて

いたこの聖徳太子縁りであろうと言われる古墳を、私はどうしてもひと目見たかったのだ。出土品の立派さにひきかえ、古墳自体はさほど大きくないけれど、その表情は威厳を感じさせるだけのものを持っている思いがした。「この古墳の上に登りたい」。これは私の素直な気持ちだった。しかし、この古墳の前には「関係者以外の立入を禁ず」と書いてあり、それもやむをえない事と思っている時「私は関係者ですから」と、古田先生自ら古墳頂上に登って行かれましたので、私も一緒に登る事が出来た。太子縁りの藤ノ木古墳に私は立つ。この感激を私はずっと持ち続ける事だと信じる。この時の気持を一言で表現するならば「女なんかメ

じゃない」。この一言につきると思う。そして古墳頂上より法隆寺の方向を

見つめ、相方の関係を考えた。太子もこの古墳の上に立ったかもしれない。なんて事を思ったりした。空は快晴、気分は絶対好調。そんなひとときだった。そして古墳に生えている柿の木から一つ失敬して、法隆寺の前に立ち、今回の旅行で同室だった藤沢さんと柿をくいながら一緒に、記念撮影をしたが、なかなか気分の良いものだった。

家に戻り、その柿の実と、古墳頂上よりも帰った小石を並べ、ながめてみると、聖徳太子の声が聞こえてくる様な気がする。

陸と 陸(その二)

武蔵野市 毛利一郎

陸のもう一つの和訓、ヲカは峰、処であって、峰のある処の意である。山をヲという古語のあったことは、神代紀に「八丘・八谷」万葉に「あしひきの峯の上の桜」などとするこ

とによって知られる。横綱双羽黒の本名北尾、プロ投手の東尾、歌舞伎の尾上などの尾は山の意味で、須佐之男命が退治したヤマタノヲロチも、峰の霊(山の神)の意であった。

陸を山のある処ととらえた峰、処は山で採取経済の生活をしたといわれる縄文人の語ではないかと考えたくなる。ところが、を処という語法は前回ののべた「くに処」という語法と同一の言語圏に属する。ヲカはやはり弥生人の言語である。

陸稲をヲカボというのは、低湿地の水田に対し、台地で栽培する稲穂



の意であろう。「陸」に上がった河童  
同然」という慣用句や、伊勢神宮式  
年遷宮の用材を五十鈴川のイカダで  
運び川曳きに対し、お木曳き車で運  
ぶ「陸曳き」などに見る陸は、川や  
海から見た陸である。古代の中国で  
は、山西の南、黄河北岸の台地を大  
陸といった(藤堂辞典)そうだが、  
日本では黄河の代りに海であろう。  
陸を山のある処ととらえたのは、日  
本では海上民の視角であった。陸の  
景色(山々の姿)を見ながら船の位  
置を知って航海するのが太古から幕  
末まで「山見」といわれる日本の航  
海術だった、と書かれるのは司馬遼  
太郎氏である。山というものの第一  
は岬のことで、山脈が海中に突出し  
ているかたちをサキというのだが、  
日本の古い船乗りたちは、この絶対  
の目じるしを神とあがめ、接頭語ミ  
をつけてミサキといった。

魏志倭人伝に「倭人は帯方の東南  
の大海に在り、山島に依りて国邑を  
なす」とある。この山島(山のある  
島)という漢語は、ユカという和語  
によく照応するであろう。弥生人は  
前回ののべた国処、クカを日本列島  
に建設する前に、まず海上から緑し  
たたるユカを見たといえよう。

岡、丘をヲオとよむのは、これも  
「峰のある処」(広辞苑)であって、  
ユのある処がユそのものということ  
になる語法は、海処が海そのもの(沢

瀉辞典)、屋処すなわち家のある処が  
大伴家持の家、すなわち家そのもの  
に転化するのと同様である。処のほ  
かに、雲居、宮居、田居(田のある  
所、転じて田)、地居(地居震るの省  
略形で地震)などの居も同様である。  
ただし座居は位(座の位置)として  
慣用されている。

ちなみにヤカはAEの法則によつ  
てヤケに転音し、オホヤケ(大宅、  
公)ミヤケ(御宅、宮家、屯倉)な  
どの語を生んだ。屯倉は朝廷の直轄  
領から収獲した稲米を納める倉だが、  
さらにまた直轄領そのものの意に転  
化した。筑紫の磐井がヤマトの軍に  
敗れたとき、磐井の子が「櫛屋屯倉  
を献りて死罪贖はむことを求す」と  
継体紀にある櫛屋屯倉は、福岡県精  
屋郡付近にあった磐井の直轄領であ  
ったろう。

高峻な山岳についてはネという和  
語があった。富士の高嶺、筑波嶺、  
高根の花などと使われる。屋根も家  
の一番高い所という意味であろう。  
ネには神がいますという山岳信仰か  
ら接頭語ミをつけてミネといった。

第七代孝靈天皇の和名、大日本根子  
日子太瓊、第八代孝元天皇の大日本  
根子日子国牽に共通する大日本根子  
日子は、日子が太陽信仰にもとづく  
尊弥であるに対し、根子は山岳信仰  
にもとづく尊弥であろう。  
さて、山を意味する和語には、ユ

とネのほかにはヤマがある。ヤマとい  
う語そのものに陸という意味がある  
のではないかとされるのは琉球語学  
者中本正智氏で、アイヌ語に陸を意  
味するヤがあり、朝鮮語に同じくマ  
ンがある。このヤとマンの重ねこと  
ば(中本氏の表現では借語接触によ  
るコンタミネーション混交)がヤ  
マかも知れないとされる。これは今  
後大いに傍証を必要とするところだ  
が、ヤマの原義が陸だとすれば、魏  
志倭人伝のいわゆる邪馬台国論争に  
出る国名の原点、邪馬は天照大神の  
海人族が筑紫に上陸(天孫降臨)し  
て、海国から陸国になったとして、  
ヤマと自弥した理由がわかるような  
気がする。海幸山幸神話の山も同様  
に陸であろう。上陸政策をとった海  
人族と、それに反対して海に残った  
人々との対立が、この神話に反映し  
ているのではないか。失った釣針を  
探しにゆくなど海幸山幸と似た話が  
インドネシア各地に存在するという  
が、そのような話を取入れて自分の  
神話にするについては、それなりの  
動機があるろう。

その陸が、緑なす山を特色とする  
日本列島の風土から、後に山の意と  
なった。ここにもユカと同様、陸を  
山としてとらえる感覚がある。

古田先生の論文紹介  
◎好太王碑の史料批判

—共和国(北朝鮮)と中国の学者  
に問う—  
◎アイアン・ロード(鉄の道)  
—韓王と好太王の軌跡—  
古田先生が、昭和薬科大学紀要第  
20号に右の二編を寄稿されているの  
で紹介する。

前篇は、碑文改削説の崩壊を確認  
した上で、碑文に出現する九回の倭  
の実体を追求、王健群氏、朴時亨氏  
の倭海賊説を、碑文の倭の現れ方  
三国志の文字用法、宋書の構成と東  
夷の王、民族名稱の使い方と碑文の  
一致等をもとに論理的に批判し、更  
に、金堤上説話が好太王碑建立の長  
寿王の時代の話であることから、倭  
が九州に都する国家九州王朝以外  
にありえないことを立証している。  
後篇は、好太王碑の示す好太王の  
行動と、魏志韓伝の語る韓王滅亡の  
背後にあるものを追求し、韓伝の辰  
韓に記載された「国に鉄を出す。韓  
・滅・倭、皆従って之を取る。…中  
略…又二郡に供給す。」に着目し、鉄  
の入手源の確保(アイアン・ルート)  
争奪こそ、魏の辰韓併合の暴挙及び  
西晋滅亡後の倭・高句麗衝突の原因  
であるとしたものである。  
両論文とも、講演会や旅行の質疑  
等で話される内容を中心としている  
が、学術論文だけに、先行論議に対  
する注記等が厳密に行われており、  
知的興奮を禁じえない。又、先生の  
普段の寛容さとは異なる学問に対す  
る姿勢の厳しさにハッとする面があ  
ることを紹介しておきたい。  
なお、編集部に右紀要を保存して  
おくので関心ある方はお立寄り下さ  
い。(編集部)